

戦後のベビーブームと少子化時代の違い

戦後のベビーブームは、減少した人口を回復し、労働力を確保するために起こりました。これは個人の意思よりも、社会全体の求めに応じた動きだったと言えるでしょう。当時は中学校までが義務教育であり、たとえ成績が良くても家庭の事情で就職する人が多くいました。また、職業訓練校も広く利用されていましたし、高校卒業後に働くのが一般的でした。大学進学は、経済的に余裕がない家庭の子は学費の安い国公立に進み、比較的裕福な家庭の子は私立大学へ進むという風潮がありました。子どもを複数育てても、進学や就職を何とか社会の中で実現できる環境があったため、多くの人が2人、3人の子どもを持つことができました。しかし現代では、こうした社会の仕組みが変化し、子どもを持つことのハードルが高くなったため、少子化が進んでいるのではないのでしょうか。

ChatGPT:

おっしゃる通り、戦後のベビーブーム期の日本では「個人の意思」よりも「社会全体の要請」によって、多くの人々が子を産み育てる方向に動いたという側面は非常に重要です。そして、それを可能にした社会の構造・経済・価値観も現在とは大きく異なります。以下に整理してみます。

■ 戦後ベビーブームの背景:個人より「社会要請」による多産

1. 国の復興＝人口増加が善

戦争で失われた人口・労働力を取り戻すため、「多産は愛国的・社会貢献的」な空気が支配的でした。政府や社会もそれを後押ししました。

2. 家族・地域・学校の一体感

大家族や地域コミュニティの支えがあり、子どもを複数育てるのが当たり前という価値観が強かった。

3. 教育と就職のシステムが「段階的に」整備されていた

- － 中学までは義務教育、あとは「家庭の事情」で進路決定
- － 高校・職業訓練校卒業での就職が当たり前。手に職がついた。
- － 国公立大学は学費が安く、成績次第で「貧しくても進学できた」
→ 多くの子どもを産んでも「なんとかなる社会」だった。

4. 就職・結婚・出産が「自然な人生コース」だった

20歳前後で結婚し、若いうちに子どもを持つことが一般的。周囲もそれを当然視した。

■ 現代との違い:個人の選択が主導、だが制約が多すぎる

1. 「子ども＝自己責任」社会

教育・住宅・就職がすべて「親の資金力と努力次第」になり、子を持つことが「リスク」とされる。

2. 進学＝当たり前、でも費用が重すぎる

大学進学率は上がったが、学費も生活費も高くなり、親の支援なしでは難しい。奨学金も「借金」扱い。

3. 正社員になれない若者も多い

非正規雇用・派遣・フリーランスなど、「家庭を支える安定した収入」が持てない人が多くなっている。

4. 子育ての「孤立化」

地域の助け合い・祖父母の支援・会社の協力が減り、「親だけで全責任を負う構造」に。

■ 「2人以上が当たり前」だった時代との違い

「2、3人ならモテなのではないか」

これはまさに「多数派である＝社会的に自然である」時代背景が生んだ価値観です。今の日本では「子どもがいない」か「1人だけ」が多数派に近づきつつあります。2人以上育てられると思える環境がなければ、人は子を産めません。

■ 結論：現代の少子化は「人の意思」ではなく「社会構造の結果」

少子化は「若者が産みたがらないから」ではなく、
「昔ならなんとかなる社会だったのに、今はなんともならない社会になった」
という構造的な問題の表れです。